2014年現代詩研究会　報告メモ

松尾省三

１　始めに

＊今回この発表を引き受けてしまった経緯について。
＊記憶を語るということの持つ陥穽も認めた上で。

２　吉本隆明作品との出会い。自己の経験に即して。

３
私が吉本作品にひかれた理由とそれへの思いがなぜ持続し得たのか。
＊思想が「大衆化」していくということと絡めて。

４　今を語ろうとすること。（いかにして今を語るのか）

資料

話す上で最小限必要と思われる分量にしました。

①　はじめて触れた詩

涙が涸れる

けふから　ぼくらは泣かない／きのふまでのように　もう世界は／うつくしくもなくなつたから　そうして／針のやうなことばをあつめて　悲惨な／出来ごとを生活のなかからみつけ／つき刺す／ぼくらの生活があるかぎり　一本の針を／引出しからつかみだすように　心の傷から／ひとつの倫理を　つまり／役立ちうる武器をつかみたす／しめっぽい貧民街の朽ちかかつだ軒端を／ひとりであるいは少女と／とほり過ぎるとき　ぼくらは／殘酷に　ぼくらの武器を／かくしてゐる／胸のあひだからは　涙のかはりに／バラ色の私鉄の切符が／くちやくちやになってあらはれ／ぼくらはぼくらに　または少女に／それを視せて　とほくまで／ゆくんだと告げるのである／／とほくまでゆくんだ　ぼくらの好きな人々よ／嫉みと嫉みとをからみ合はせても／窮迫したぼくらの生活からは　名高い／恋の物語はうまれない／ぼくらはきみによって／きみはぼくらによって　ただ／屈辱を組織できるだけだ／それをしなければならぬ／

＊吉本隆明全著作集１（勁草書房）定本詩集はⅠ～Ⅴに分けられ、Ⅱが「固有時との対話」、Ⅲが「転移のための十篇」となっており、この詩はⅣに含まれる。

ちひさな群れへの挨拶（現代詩文庫　p44）

② 現代詩文庫「詩とは何か」から

A 詩とはなにか。それは、現実の社会で口に出せば全世界を凍らせるかもしれないほんとのことを、かくという行為で口に出すことである。こう答えれば、すくなくともわたしの詩の体験にとっては充分である。しかし、これは、百人の詩作者にきいて、百通りの答えがでるなかのひとつの答えにしかすぎない。以前なら、このほかに必要なしとかんがえ、判断をとめたにちがいないが、・・・・（p.35）

B これを、やさしく翻訳すれば、現存する社会に、詩人として、いいかえれば言うべきほんとのことをもって生きるということは、本質的にいえば個々の詩人の恣意ではなく、人間の社会における存在の仕方の本質に由来するものだ、ということになる。これを、わたしのかんがえにひきよせていいかえれば、わたしたちが現実の社会で、口に出せば全世界が凍ってしまうだろうほんとうのことを持つ根拠は、人間の歴史とともに根ぶかい理由をもつものだ、ということに帰する。（P.67）

C わたしたちは、詩がうまくかきおわったとき、散文である事実をうまく指示したときと比較にならない充実感または空虚感をもつ。そして、わたしたちの詩が他人に読まれたとき、詩の意味や主題やモチーフがまるで通じないとしても、この放出した感じだけは伝わるはずだという希望をいだくのである。巫女が神にじぶんがのりうつったことを信ずるように、わたしたちは詩においてじぶんが言葉にのりうつっていることを信ずる。放出感や充実感はその代償である、というのも巫女とおなじだ。

まず、このときの充実感または放出感はわずかのあいだしか持続しない。再体験するには、じぶんの作品でさえ読みかえさなければならないくらいである。わたしたちは、やがて元の木阿弥にかえって、ふたたびほんとのことをいえば世界は凍ってしまうというあの定常的な精神状態にもどらなければならない。

つぎに、この充実感または放出感は、ある意味のことをはっきりと指しえたという感じとちがっている。Aはかくかくの理由によってBである、というようなことを散文でうまく論理づけても、ある濃みのようなものが意識にさわっているのを感ずるが、詩をうまくかきおえたときには、澱みがのこらないのである。

また、この充実感や放出感は、憑いた感じに似ている。神憑ったのでもなければ、狐が憑いたのでもなく、イデオロギーが憑いたのでもなく自然が憑いたのでもなく、自己が自己に憑いた感じである。（P.81）

③ 「高村光太郎」より

戦前派の詩人ならば、胸に手をあてればたれでもおもいあたるはずだが、現実のうごきのはげしい動乱期には、個人の自我というものが、けし粒ほどにかるくおもわれてくる。そこに執着し、暗い内部的なたたかいをつづけることが、バカらしく、みじめな、無意味なことにおもわれてくる。外からよからぬ奴が足をひっぱってそうおもわせるばかりでな

く、内部から心理的にそうおもわれて崩れてゆく。動乱期の現実のおおきな圧力、おそろしさを、正面からうけとめただしく克服しえたものは、内部を現実のうごきとはげしく相渉らせ、たたかわせながら、時代の動向を凝視してはなさなった、そういう至難の持続力をもつものだけであった。高村が反抗をうしなって、日本の庶民的な意識へと屈服していったとき、おそらく日本における近代的自我のもっともすぐれた典型がくずれさったのである

④　日下部正哉　「吉本隆明　敗戦期の思想」（雷電 6 号）より

敗戦期、吉本を批評を書くことへとうながしたのは小林秀雄である。正確に言えば、小林秀雄の不在である。

わたしは、戦争中、小林秀雄の熱心な読者であった。　敗戦直後の混迷のなかで、この文学者の声はもっとも　ききたい声のひとつだったが、聞きえなかったという　記憶をもっている。かれの沈黙はそのとき戦争の傷を　なめていたことを象徴している。熱心な読者というの　は、いつも極端に相手をじぶんの想像で作りかえてじ　ぶんがその声をききたいと願っているのと、まさにお　なじ理由で文学者は声をのんでいなければならないこ　とを、決して理解しようとしない読者のことをいうの　だが、わたしもまた、ご多分にもれなかった。　（「小林秀雄の方法」）

あたかも［もっともききたい声］を「じぶんの想像で作りかえ」るかのように、吉本は小林秀雄の文体を模倣して、たとえば┐伊勢物語論」、「歎異紗に就いて」（昭和二十一～二十二年）といった批評をものしていったと考えられる。このとき、吉本にとって小林秀雄の文体の外被をまといつつ古典を読むことが、かろうじて文学的な思考を持続する方途だったのだ。雑誌「詩文化」に発表された先の三篇もまた、言及されている詩人や思想家の名前だけを見れば、小林秀雄の思想的、文学的青春を彩った巨星たちの言葉かたどりなおされていることがわかる。しかし、小林秀雄の足跡を追うようにみえながら、「詩と科学の問題」、「ラムボオ若くはカールーマルクスの方法に就ての諸註」、「方法的思想の一問題」という批評の連作には、あきらかに吉本固有の問題系がせり出すように現れている。いってみれば、小林秀雄的文体をさなぎとしつつ、そのなかで変態を遂げた吉本隆明かいままさに殻を破って、その剛直な形相をのぞかせているかのようなのである。　これら三篇の批評で吉本がこころみたのは、詩的思想と科学的思考を対位させながら、批評の極限として詩（言葉）を科学するという構想を提示するということだったが、そのモチーフは、現在の個別化されたカテゴリーで言えば、科学哲学、経済学、詩学といった領域を横断しつつ、そのすべてを綜合しようとする欲求に貫かれていたと言っていいだろう。だが、それは知的な、そして思想的なモチーフですらなく、吉本の心象に投影された敗戦期の空気、そのどんづまりの感触から発する、いわば存在的なモチーフにほかならなかった。

近代
(the Modern Age)

→8「木を伐る人／植える人」、16「『市民』のイメージ」、49「ホンモノのおカネの作り方」、90「病と科学」、142「南の貧困／北の貧困」、150「戦争の〈不可能性〉」、156「『である』ことと『する』こと」、210「ぬくみ」、218「身体像の近代化」、238「抗争する人間」、246「虚ろなまなざし」、254「ある〈共生〉の経験から」、270「日本文化の雑種性」、286「現代日本の開化」

近代とは歴史の時代区分の一つ。西洋史では古代、中世、近世に続く特定の歴史的時代を指す。具体的には、ルネサンス、宗教改革以降の時代、特に市民革命・産業革命以後の資本主義社会の時代をいう。日本史では一般に明治維新から第二次世界大戦終了までの時期を指し、以降を特に**現代**という。

さて、市民革命が成し遂げた最も大きな成果は、身分制社会から人々を解放したことにある。それまで土地や身分に縛りつけられていた人々が、封建的な因習・様式などから脱し、合理的・科学的・民主的な考えに基づいて生きる**市民**（citizen）になったのである。市民は一個の独立した人格としてそれぞれの社会の構成員であり、加えて、近代市民の場合は特に、自らが属する社会の法を制定する主体である点に特徴がある。市民一人一人は絶対的な自由をもち、人として生きる権利（＝**人権**）を有する。市民に拘束があるとすれば、それは本人の自由意思によって制定された「社会の法」によるものである。それゆえ近代社会は、政治的には**民主主義**、思想的には個人主義を基調とした、自由な諸個人によって構成される自由な社会となったのである。

このような前提のもとに**市場経済**が全面化し、資本主義が発展した。近代法は、**共同体**の慣行を破壊しつつ、自然環境の全ての事物に所有権を設定し、市場経済に投入できる資源へと変貌させることを可能にする。近代法は、人々に自由な法的主体としての輪郭を与えるとともに、国境内の、自然環境を含む全ての物理的空間を、近代的な所有関係によって覆いつくしたのである。この発想が国家の外部へと延長されるとき、所有関係が設定可能な空間としての**植民地**が生まれる。

ここで、近代を象徴する**システム**としての資本主義は、共産主義や社会主義といった政治的な**イデオロギー**のことではない。資本とは増殖することを常態とした貨幣のことであり、資本主義経済とは、増殖すること、運動し続けることを宿命づけられた、全世界を覆う貨幣の**流通**システムのことである。資本家は、資本（元手）を使って貨幣を移動させ、そこから利益を生み出すことで資本を増殖させていく。物を作りそれを売るだけでなく、複数の異なる市場を対象とすることで、その差異に価値を見いだしていくこともできる。

また、近代の市場経済が、単なる商品経済と異なるのは、交換される財が生産要素（資本・土地・労働）にも拡大されている点にある。特に資本主義の発展にとって、職業選択の自由に基づいた労働市場の成立は不可欠の前提となる。労働力を時間単位で売買する賃労働の発想が一般化して初めて、生産要素を自由に組み合わせ、利潤の拡大を図ることが可能となるのである。

近代における国家のありように目を転じてみれば、現在地球上に存在する国家は、国民国家（nation state）と呼ばれている。これは、一つの国民（nation）によって構成された国家（state）という意味である。だが国民国家といっても、そこに帰属する**民族**は一つではないし、国家の領域内で話されている言語も一つとは限らない。国民国家における国民という単位は、国民国家の形成に伴って新しく作られた概念なのである。国民国家の形成過程において初めて同一国家内に生きる人間を同胞（我々）として捉えられるようになったことを踏まえて、国家を「想像の共同体」と呼ぶこともある（ベネディクト・アンダーソン）。

この、国家を「想像の共同体」と呼ぶ考え方に表れているように、国民国家という概念は今では自明のものではなくなってきている。二十世紀後半、近代の後の時代（ポストモダン）を考える思想運動が活発となった。その主張は、近代の価値観（自由や民主主義）は恣意的・歴史的なものにすぎず、絶対的・普遍的に考えることはできない、というものである。こうして、近代の原理に依拠しながら、近代の価値観の外に出る試み（脱構築）や、その論理構造を対象化する試み（自己言及）が、ポスト近代思想の中心的なテーマとなった。

しかしポスト近代思想は、近代の価値観に代わるもう一つの制度を提案するものではなく、近代の限界を近代の原理に即して示すものであった。ゆえに、我々はいまだ「近代」という歴史的時代の延長線上を生きているのだと考えることができる。

語句の解説

民主主義（democracy）

民主主義とは、本来権力をもたない民衆（市民、人民）が、合意によって国家や社会の意思決定を行う仕組みである。民主主義は、その集団の内部に所与の権威を認めない。だからこそ、人民が人民の名において制定した法に権威が認められ、個々人はその規則に従うことが求められるのである。

市場経済（market economy）

計画経済と異なり、個々の経済主体が自由に経済活動を行い、市場（マーケット）における需要と供給のバランスによって価格と取引数量が調節される仕組みのこと。

植民地（colony）

植民地とは本来、ある国からの植民（移民）によって開発や支配が進められる本国以外の地域を指す。十六世紀頃から、ヨーロッパ各国は侵略によって獲得した海外領土を保護国として従属させ、自国の発展の基礎としてきたが、第二次世界大戦以降、アジア及びアフリカにおける多くのヨーロッパ諸国の植民地が独立を果たした。しかし旧植民地にはさまざまな課題が残っており、その問題を把握するため始まった文化研究は、ポストコロニアリズム（post-colonialism）と呼ばれている。

民族（nation／ethnic group）

民族とは「我々○○人」という帰属意識を共有する集団のこと。国民（nation）の範囲と一致しないことが多く、複数の民族が共存する国家が多い。民族や国民という単位に基づいて同胞意識が発揚されるのが**ナショナリズム**（nationalism）である。

現代評論を読むために❶

近代

（高校の現代文の教科書より）

-4-